

万葉集「敬和立山賦」の「そがひ」に関する 実景論的考察

藤 田 富士夫

I. はじめに

筆者は、本誌前号で『万葉集』で難語の一つとされる「そがひ」について実景論的立場からの考察を行った⁽¹⁾。本稿は、その続考として執筆した。「そがひ」は集中に12例見える。

単独語形では表れず、「そがひに」という副詞形をとる。下接する動詞も①「見ゆる」、②「見つつ」、③「寝しく」の3つに限られる。その解釈には諸説あって、いまだ定説をみない。このことは万葉学の手法だけでは解ききれないものがあることを示唆する。

筆者は、万葉学において実景論的視角がやや弱いのではないかと感じている。そこで極力、歌作の現地（もちろん擬定地ではあるが）に立って、それが示す景に従って解釈する方法をとっている。前号では次の3首を取り上げて「そがひ」を説いた。

○筑波嶺（寝）に そがひに見ゆる 葦穂山 悪しかるとがも さね見えなくに
（巻14・3391）

○我が背子を いづち行かめと さき竹の そがひに寝しく 今し悔しも（巻7・1412）

○かなし妹を いづち行かめと 山菅の そがひに寝しく 今し悔しも（巻14・3577）

これらには「そがひに見ゆる」、「そがひに寝しく」とある。下接動詞の異なりはあるが、いずれも「寝」をテーマとしている。奈良時代の人々の「寝」に対する共通思想の表現に着目して、この3首を選んだ。

ここで詳説はしないが、「筑波嶺に そがひに見ゆる」歌では、現在同定されている筑波山と足尾山とは、相似形をした山容が「斜め後ろ」に存立する景を示していた。それと同じ景が、「さき竹」や「山菅」の在り方にもうかがえた（写真1・2）。このようなことから私考では、これらの「そがひに」にあつては、「斜めに向かい合う」や「斜め後ろ」の解釈が妥当であるとした。

これまで万葉学において大伴池主による「敬和立山賦」（巻17・4003）の序の「朝日さし そがひに見ゆる」は様々に解されており難語の代表的事例となっている。本稿では、かかる万葉歌の「そがひ」を実景論的に検討しようとするものである。

II. 実景論的検討にあたって

(1) 立山賦と敬和立山賦

ここでは次の歌群を検討素材としたい⁽²⁾。

○立山の賦一首 併せて短歌 この立山は新川郡にあり

天離る 鄙に名かかす 越の中 国内ことごと 山はしも しじにあれども 川はしも
さはに行けども 皇神の うしはきいます 新川の その立山に 常夏に 雪降り敷きて
帯ばせる 片貝川の 清き瀬に 朝夕ごとに たつ霧の 思ひ過ぎめや あり通ひ
いや年のには 外のみも 振り放け見つつ 万代の 語らひぐさと いまだ見ぬ 人にも
告げむ 音のみも 名のみも聞きて ともしぶるがね (巻17・4000)

○立山に 降り置ける雪を 常夏に 見れども 飽かず 神からならし (巻17・4001)

○片貝の 川の瀬清く 行く水の 絶ゆることなく あり通ひ見む (巻17・4002)

四月二十七日に、大伴宿禰家持作る。

敬みて立山の賦に和ふる一首 併せて二絶

○朝日さし そがいひに見ゆる 神ながら み名に帯ばせる 白雲の 千重を押し別け
天そそり 高き立山 冬夏と 別くこともなく 白たへに 雪は降り置きて 古ゆ あり
来にければ ござしかも 岩の神さび たまきはる 幾代経にけむ 立ちて居て みれど
も異し 峰高み 谷を深みと 落ち激つ 清き河内に 朝去らず 霧立ち渡り 夕されば
雲居たなびき 雲居なす 心もしのに 立つ霧の 思い過ぎさず 行く水の 音もさや
けく 万代に 言ひ継ぎ行かむ 川し絶えずは (巻17・4003)

○立山に 降り置ける雪の 常夏に 消ずて渡るは 神ながらとそ (巻17・4004)

○落ち激つ 片貝川の 絶えぬごと 今見る人も 止まず通はむ (巻17・4005)

右、掾大伴宿禰池主和へたり。四月二十八日

(2) 歌作時期の天気概況

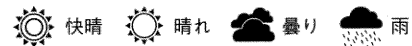
これらの歌群にあつては、天平19(747)年4月27日に大伴家持が「立山賦」を詠じ、4月28日に大伴池主が「敬和立山賦」を詠じている。天平19年4月27日は陽暦(グレゴリオ暦)6月13日に、4月28日は6月14日に相当する。それが「嘱目」歌であるとするれば、「朝日さし そがいひに見ゆる」景は、この頃の“日の出”と“立山”との関係の中で成立する。手がかりを得るには、少なくとも当時の富山地域での気象条件が考慮されなくてはならない。とはいっても現実には存在しない。そこで今日の富山地域の気象情報を仮借して検討を行いたい。

天平19年月日	2/25日	3/25日	26日	27日	28日	29日	30日	4/1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	12日	13日
平成23年月日	4/13日	5/12日	13日	14日	15日	16日	17日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日
天気																				
山岳眺望予報 (%)	60	40	40	70	60	50	30	70	70	70	60	30	30	70	70	40	30	30	30	30
家持と歌作						歌作	二上山の賦													
観測・備考	仏田 写真10							[歌作なし]	片貝川											

天平19年月日	14日	15日	16日	17日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	5/1日	
平成23年月日	31日	6/1日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	12日	13日	14日	15日	16日	17日	
天気																			
山岳眺望予報 (%)	50	40	30	50	60	40	40	70	40	40	30	30	40	40	40	60	40	30	
家持と歌作			歌作				歌作				歌作		歌作	家持 [立山の賦]	池主 [そがひ] 歌		歌作		
観測・備考		[歌作なし]			伏木 写真4				片貝川 写真12	片貝川	片貝川		片貝川				片貝川 写真16	片貝川 写真13	片貝川

天平19年月日	2日	3日	4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	12日	13日	14日	15日	16日	17日	18日	19日	20日
平成23年月日	18日	19日	20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	30日	7/1日	2日	3日	4日	5日	6日
天気																			
山岳眺望予報 (%)	40	50	50	30	30	30	40	30	40	50	40	40	30	30	40	30	30	40	40
家持と歌作																			
観測・備考	5月初 上京 梅雨入り												片貝川 写真17						片貝川 伏木 写真7

第1図 平成23年5月12日～7月6日までの天気と山岳眺望等の一覧



(「天気」は魚津地域のもを掲げた。「山岳眺望予報」は富山平野から立山連峰をみた場合。以上は『北日本新聞』の「富山の天気欄」を基に作成した。「観測」は筆者が現地に出かけた日。)

気象データは、平成23年度の地元紙『北日本新聞』に発表されたものを用いた。ここに4月13日と5月12日～7月6日までを一覧表にした(第1図)。「天気」欄は、筆者が本歌の舞台と考えている魚津地域のもを掲げた。ただし、これは天気概況であって、早朝に「朝日さし」の現象があったとしてもたちまちに雨天や曇天になる場合がある。早朝の天気は刻々と変化する。魚津地域では5月26日以降、6月28日まで雨天や曇り日が多く不安定な日々が続いた。ちなみに当地域は6月18日に梅雨入りし、7月9日に梅雨明けとなった。

北日本新聞には富山地域固有の「富山市からの立山眺望の週刊予報」が掲載されている。眺望予報を%で表したものであり山岳を仰ぐ目安となる。これは観察に出かける際の判断に役立った。ただし、今回の経験からは60%以上の予報が出ている絶好日であったとしても、早朝にあっては眺望の無い日もあった。一方で予報%が低い日でも眺望が期待できる日もあった。山岳の視界には手ごわいものがある。

参考のため第1図には家持の歌作日と、筆者による現地(片貝川・伏木)観測日を記した。観測は、「朝日さし そがひに見ゆる」の歌作日に相当する6月14日を中心に据えた。残念ながら当日と前日の「立山」(タチヤマ=筆者が比定する毛勝山)の早朝の山岳は雲に隠れて姿を見せなかった。けれども6月8日、15日、16日には「立山」と日の出の関係を現認することができた。なお、夏至の頃の日の出は1年中で最も早く、富山地域での6月14日の日の出時間は4時32分である。

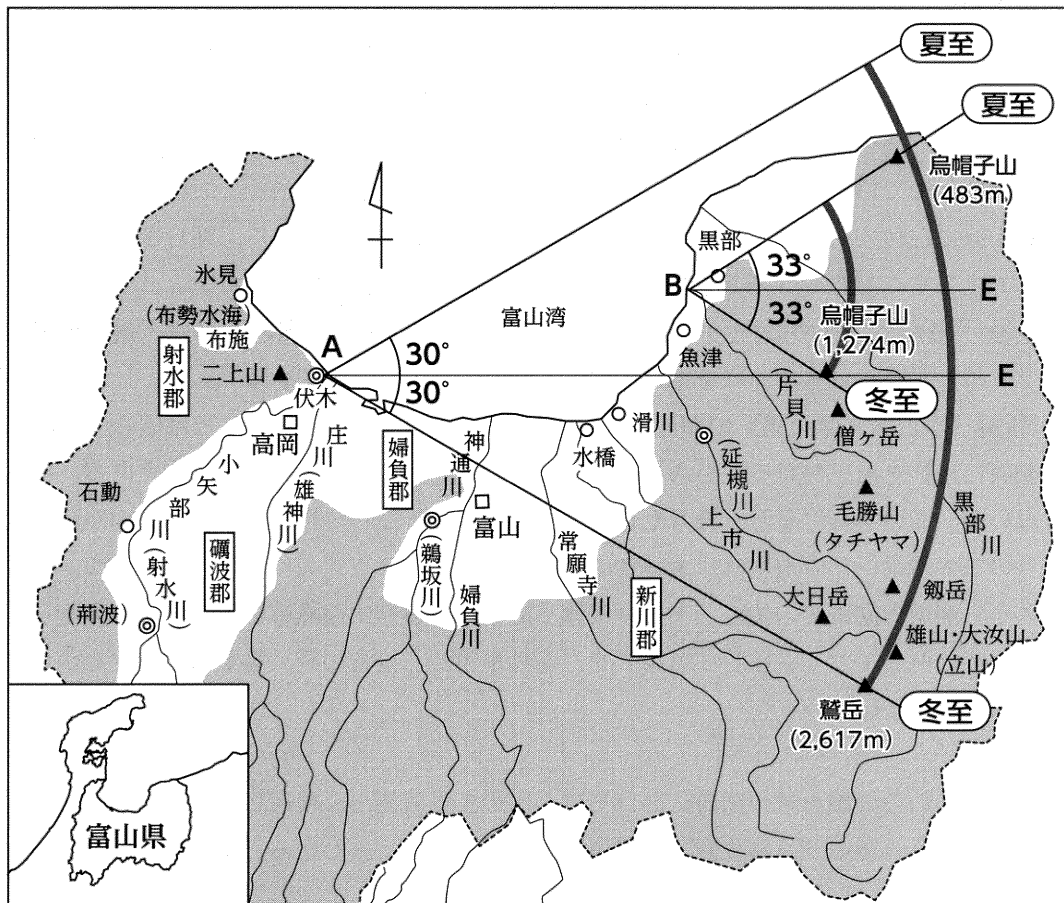
もちろん、天平19年と平成23年の天気が同じというのではない。けだし越中国における夏至の頃の太陽の見え方や天気まわり、梅雨入りなど、季節の概略をうかがうには参考に値すると思っている。

加えて、「朝日さし そがひに見ゆる」の理解には6月14日頃の「朝日」の射し方を知っておく必要がある。それは夏至(6月22日ごろ)に近い時期のことである。従前の研究において、この基本的事項が疎かにされてきた嫌いがある。次に一般に周知の知識ではあるが書いておく。「北半球の夏至では、太陽は真東よりやや北側から斜めに昇って真南に達し(南中)、真西よりやや北側に沈む。夏至では南中高度が1年でもっとも高くなり、太陽光がもっとも強くなる。一方、冬至では真東よりやや南側からのぼって真西よりやや南側に沈む。南中高度は1年でもっとも低くなり、太陽光はもっとも弱くなる。春分と秋分では、太陽はその中間の真東から昇る」のである(第2図)。

Ⅲ. 「朝日さし そがひに見ゆる」の研究と実景論的検討

「敬和立山賦」歌に対する主な先行研究を見ておきたい。以下の諸説は歌題の「立山」を今日の狭義の“立山”(雄山・大汝山・富士ノ折立=立山三山ともいう)や広義の“立

山連峰”（剣岳、立山三山、大日岳など）に比し、いずれも詠み手の“立ち位置”や“歌作地”を越中国府（富山県高岡市伏木）としている。



第2図 越中国府（A）と片貝川下流（B）での夏至と冬至の日の出方向

(1) 後方や横とする説

山田孝雄は、「そがひに見ゆる」は「ウシロニアル」由の語とし、「國府より東に向ひて朝見れば、朝日の立山に射してありと見ゆる時に立山を見れば、朝日を受くる面は國府より見ゆる面の背面なり」としている⁽³⁾。

武田祐吉は、「阿佐比左之 アサヒサシ。朝日サシで、實景である。立山は、越中の國府からは東南に當るが、その山の、朝日を受けている姿を描いている。曾我比爾見由流ソガヒニミユル。ソガヒは、後方、もしくは横の方をいう。池主の館あたりから、正面は南で、立山は横に見えたのであろう」としている⁽⁴⁾。

澤瀉久孝は、「背向に見ゆる」は背面に見えるに立脚して、「立山は作者のゐる國府の伏

木からは東南に當り、朝日のさすのも同じ方向だと思ふ。即ち朝日を背に受けて逆光線の中に立ってゐる、といふ事になる。するとこの二句は『背面に朝日がさして見える』といふ事を句法の都合で『朝日さし背面に見ゆる』と云つた」としている⁽⁵⁾。

武智正人は、「このそがひは単に後方の意であろう。(…中略…) 歌の視点は国府の地にあり、開けた越中原野の後背に立山がそそり立つのではないか」としている⁽⁶⁾。

『新潮日本古典集成』も澤瀉と同様に、「そがひに見ゆる 東方の逆光の中にたつ山の姿を、背を見せていると捉えたか」としている⁽⁷⁾。

富山県に在住する廣瀬誠は、『朝日さし』そのためそがひに見える、朝日さすといふ条件のもとでそがひに見えると解すべきであらう。『朝日さし逆光のため煙らって見える』光景を、『そがひに見ゆる』(うしろ向きに見える)と表現したと解釈すれば、最も単純簡潔で、越中平野から立山連峰を望む実情にも叶ってゐる」としている⁽⁸⁾。

『新編日本古典文学全集』の頭注には、「ソガヒは背後。ただし真後ろとは限らず、時には側面に用いたと思われる例もあって、漠然と、遙かかなた、と解する説さえある。確信はないが、この場合、夏至(五月七日=太陽暦六月二十三日)に近く、日出方向が最も北寄りのこの時期、作者池主は伏木『富山県高岡市内』から東北東に日の出をみつ、その方角から西南方向までの約百三十五度に渡って望まれる立山連峰の山並みを広く見渡して言った、と解しておく」とし、口語訳を「朝日が差し 後ろに見える靈山 神さながらに(…下略…)」としている⁽⁹⁾。

次に、これらの説を越中国府における日の出の実景観測から検討したい。いずれも越中国府の地に詠み手の“立ち位置”を置いている。これは、いわゆる「伏木国府における遠望説」と称されている(写真3)。

第2図で示したように伏木台地では、夏至の太陽は真東から約30度北寄りの富山湾から昇る。「敬和立山賦」が越中国府からの実景として詠まれたのであれば、夏至の頃の「朝日さし」の景が問題となる。なお冬至の太陽は真東から約30度南寄りの鷲岳(2,617m)から昇る。その近くには立山連峰の主峰(剣岳、雄山、大日岳など)が集まっている。冬至の頃には、立山連峰の背後から太陽が昇る。

筆者は、平成23年6月4日の早朝に高岡市立伏木小学校の校庭で日の出を観測した。そこには家持の館跡が存在した可能性があり、筆者はとりわけその地に愛着を抱いている⁽¹⁰⁾。4時36分に台地に立った。日の出の予定は4時33分のはずだが、一帯はまだ薄暗い。南東には立山連峰が薄暗い中でボヤッとした稜線を描いている。富山湾の水面が紅色づいてゐるが地平線がもやっていて陽光は確認できない。4時58分、突如としてビル陰から強い日射しを持った太陽が昇ってきた(写真4)。夏至のころの太陽は直視出来ない。標高約8m

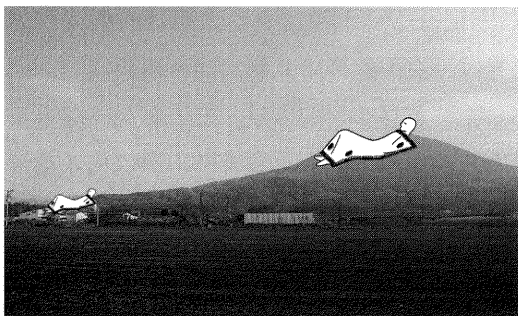


写真1 筑波山（右）と足尾山（左）に見る「そがひ」の景



写真2 山菅の「そがひ」の景



写真4 伏木台地の日の出の景（6月4日・4時58分）

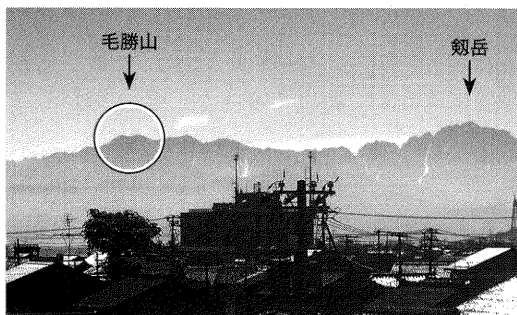


写真3 伏木台地から見た立山連峰（良く見える時の景）



写真5 伏木台地の「日の出」
—山肌にガスがかかった—



写真6 流杉PAから見た早朝の立山連峰（7月6日）



写真7 伏木台地から見た立山連峰の方角（7月6日）

の台地からは、太陽を斜下～真横方向に見ることになる。水平に見る太陽は直射光が際だっていて立山への視線が奪われてしまう。陽光は、立山連峰の北側斜面～西斜面（国府から見て“正面”を成す）の山肌を明るく照らした。直後の5時04分、思いもかけないことが起こった。日射熱のためであろうか山肌にガスがかかって、たちまち山影は見えなくなってしまった（写真5）。

この時（4時58分～5時04分）立山連峰は「朝日さし そがいひに見ゆる 神ながらみ名に帯ばせる 白雲の 千重を押し別け 天そそり（…下略…）」と詠じられた神々しい雰囲気は見せなかった。諸説のような現象は何一つ起こらなかった。「朝日さし」になったら、たちまち“立山”にガスがかかり、「そがひ」はおろか「見ゆる」ものなどは何もなかった。

念のため7月6日に再度観測を試みた。この日は早朝から視界が良かった。北陸高速自動車道を用いて、もう一つの観測地（私説での本命地 —後述—）である片貝川を早々に切り上げて伏木台地まで一気に車を走らせた。朝6時50分に流杉PAから見た立山連峰は輪郭をきれいに見せていた（写真6）。ところが7時33分の伏木では山岳全体にガスがかかり輪郭はまったく見えなかった（写真7）。帰路、片貝川へと再び車を走らせた次第に山岳が浮かび上がってきた。この日の視界は対象地との距離に関係していた。ちなみに流杉PAと立山連峰とは約22.5km、伏木台地と立山連峰とは約61kmある。伏木台地からの立山連峰の早朝の視界はよほどの条件が整わないと良好とはいえないようだ⁽¹¹⁾。

このころの太陽は決して立山連峰の背後からは昇らない。故に「朝日さし」の“逆光説”は成立しない。同様に稜線を浮かび上がらせるようなシルエット現象も起こらない⁽¹²⁾。また周囲を一望に見渡せるような視界に恵まれることもない。これらの諸説は、国府からは立山連峰が「東」（実際は南東）に位置するといった観念的な思い込みがあるようであり、また「日の出」の景を正確に把握していないと思われる節がある。

（2）遠く離れゆくイメージ説

小野寛は、『朝日さし・朝日さす』とは朝日が昇ってその光が射し照らすのである、「池主が歌った立山は「朝日が昇ってその朝日が稜線を照らしている情景がとらえられたものでしょう」とする。そして「立山も越中国府の東方はるかにそびえている。『朝日さし』は山全体がすでに輝いている情景を表している。山の陰を見ているのではあるまい。『そがひに見ゆる』は『朝日さし』とは切り離し、立山の越中国府からの眺望のあり方をとらえたものと解したい。それは、空の彼方へ離れ遠ざかりゆくイメージである」としている⁽¹³⁾。

古舘綾子は、池主の歌で「注目すべきは、立山が『神ながらみ名に帯ばせる』と形容さ

れていることである。このように表される靈妙高い立山は、それ故、詠み手の側から距たりのある存在と感じられる対象であり、『そがひに見ゆる』はその心理的距離を表現したものと読める、「つまり、ここでの『そがひに見ゆる』は立山に対する讃辞なのだ」としている。そして「小野〈寛〉氏が指摘する、『遠く離れゆくイメージ』という物理的な距離感に加え、対象との心理的距離感をも含み持つ語であり、それゆえ讃歌に用いられたのである」としている⁽¹⁴⁾。

次に諸説を検討しておきたい。前述したように平成23年6月4日と7月6日の越中国府域からの日の出の観測では太陽と立山の関係性の現認には至らなかった。つまり“遠く離れゆくイメージ”をうかがう機会すら持てなかった。

筆者はこれまで何度か、日の出の写真撮影を行っているが、朝日が射した瞬間の山岳には、いつも“近づくイメージ”の被写体を感じてきた⁽¹⁵⁾。もっともこのことは個々人の脳の視覚野に関する事項である。その判断は、脳科学の研究によって成されるのが望ましい。けだし、それは「そむく→離れる」つまり「離れ去る」といった文学上の解釈から成されているので、実際の見え方の検討にはなじまないかもしれない。

ここで、「筑波嶺に そがひに見ゆる 葦穂山」(巻14・3391) 歌を見ておきたい。現代語訳は「筑波嶺から 後ろに見える 葦穂山 あしというほどのあかも ぜんぜん見えないあの人」とされている。この歌は、茨城県つくば市・桜川市・石岡市にまたがって所在する筑波山と足尾山との相似形による比喻歌と解することができる⁽¹⁶⁾。

この歌の実景からは、筑波山と足尾山といった固定化された2つの対象を比較凝視する視点はうかがえるものの、そこに“遠く離れゆくイメージ”を感じとることは出来ない。このことは筆者が『万葉集』の心象世界を汲みとれないことによるのかもしれないが、ここに実景の視角からの所見として記しておきたい。

(3) 伝聞・イメージ風景説

鴻巣盛廣は、家持による「立山賦」の立山について、「この山を國守館から毎日眺めて受けた感じと、人から傳へ聞いたところとを適當に按配して立山を綴ったもの」としている⁽¹⁷⁾。

広瀬誠もそれを踏襲し「家持は片貝川の実地を踏まずして詠じている。(中略) 池主は、家持以前から越中国に在任していたので、片貝川の激つ瀬を実見して『敬和立山賦』に織り込んだのであろう。家持はおそらく池主などの話を聞いてこれを参考として歌に詠み入れたのであろう」としている⁽¹⁸⁾。また「立山賦」には題詞や左注などに「実地に出向いたとは記してゐない。前々からの感動や知識を総動員して、国府から見えるこの

山に向かひ、『賦』といふ晴の大作をまとめあげたものと解して少しも差支へないのである」ともしている⁽¹⁹⁾。

梶川信行の見解はさらに徹底している。「敬和立山賦」について「この歌の『片貝川』は、実際に見た風景を詠んだものではなく、地図から得た知識を前提としたものであったということになる。あるいは、天平期において、越中の国守が出挙のために巡行すべき範囲は片貝川までである、という職務上の知識を前提としていたのかも知れない。いずれにせよ、この歌の『片貝川』は、頭の中でイメージした風景であり、神の山としての「立山」をうたうための道具立ての一つに過ぎなかった」としている⁽²⁰⁾。

次に諸説を検討しておきたい。「伝聞・イメージ説」は鴻巣以来の伝統的解釈論と思われる。近年の梶川説に至っては、「朝日さし そがひに見ゆる」景は、頭の中で作られた虚像歌とされている。けれども果たしてそうであろうか。

近年、奥村和美による注目すべき研究が発表された。それは、家持の「立山賦」は山部赤人の不尽山歌と登神岳歌の表現を踏襲したものであり、池主の「敬和立山賦」はそのことを完全に把握して詠まれているとする。奥村は、関連歌を比較検討し、立山賦が「川霧を序とすることにおいて先の赤人反歌を直接の範とすることは諸注の指摘するとおりである。その序の『帯ばせる 片貝川の 清き瀬に 朝夕ごとに たつ霧の』は、囑目の景の描写である」としている。

さらに、「このとき家持と池主が現在『萬葉集』巻三として残るものと同じものを所持していたのか、それともその原形というべき資料的なものを所持していたのか定かではないが、すでに編纂されてあった一定の作品群の中から赤人歌を選択しようとする態度を家持と池主に見出すことができる」と説いている⁽²¹⁾。

論旨は、これまでの「立山賦」、「敬和立山賦」の諸研究を深めており説得的である。「囑目の景の描写」というのは、実景描写を意味する。

また、万葉歌には「見ゆ」が多用されている。「そがひに見ゆる」もその一つである。「見ゆ」は平安時代の『古今和歌集』にはほとんど用いられていないとされている。上野誠は、それは「七世紀と八世紀を生きた万葉びとに愛好された表現なのである」、「万葉びとが自己を中心として主体的に対象（外部）を把握する」表現としている。「見ゆ」は「見る人の霊力が十分で、見るという呪術が達成され、外部世界がしっかりと把握されたことを表明する表現なのである」としている⁽²²⁾。

「そがひに見ゆる」が、かかる概念における用法と解すれば、「朝日さし」によって引き起こされる現象が池主によって主体的、かつ霊的能力の駆使によって把握されたときであろう。後述するが、毛勝山の北東斜面が夏至のころに「朝日」が射して照り輝く現象は、ま

さに「見ゆ」で表現されるべき感動を伴っている。「朝日さし そがひに見ゆる」は、実景描写の景であったと筆者は考えている。

IV. 「朝日さし そがひに見ゆる」実景論的考察

(1) 川上正二説とそれへの批判

川上正二（故人）は、富山県魚津市に住まいする郷土史家である。市域の東西堺には、『万葉集』に歌われた早月川と片貝川とが流れている。郷土愛を前面に出した川上は、「家持は、毛勝山を遙拝しつつ、立山の賦を詠んだ」と主張し、本歌の「立山」は魚津市の東方にそびえる「毛勝山」を指すとした。

川上は、毛勝山からの日の出を昭和50年6月17日の早朝に見た時の感動を次のように記している。「まだ富山平野に朝日が射さず、傍らの僧が岳や剣岳に何等の変化をみせないのに、毛勝山の東斜面が朝日を受け、次第に色づきはじめてきたからである。時刻は午前四時二九分で、自分の目を疑ったくらいである」、「立山連峰から見て越中平野を表向きとすれば、朝日がいまだ富山平野を照らさない範囲が背面となる。すなわち『そがひ』に当たると解釈する。現実的にいえば毛勝山にとって東斜面かもしれないが立山連峰を表裏の二つに分けた場合には朝日の射した範囲は表であり、朝日のいまだ射さない範囲は裏であり、その裏がすなわち『そがひ』にあたる」とした。川上の観察は仔細である。毛勝山は「高さ2,000メートル級上の立山連峰にあって、朝日をもっとも早く受ける山であるから、他山の影となるなど禍いを受ける率が低いこと。東の稜線に欠刻があり立体感を与えていること」などを得々と説いた⁽²³⁾。

一方、川上説に対して広瀬誠は徹底批判を行った。「氏の大胆な推論はまことにおもしろいが、学問的常識を踏み出した勇み足も多々ある」とし、「とにかく、『背面に朝日がさしてゐる』といふ転倒した解釈は成立せず、毛勝山の一角に朝日がさすなど、とんでもない曲解誤解の出る幕は全くないのである」と酷評する⁽²⁴⁾。

広瀬は、富山県史学界に多くの業績を残した碩学である。私も生前の広瀬を尊敬し、親しく指導をいただいた1人である。かかる広瀬が、不快感露わに川上説を切り捨て、「文学には虚構も時に必要であるが、史実に虚構はあってはならない」と正論を呈した。これによって川上説は異説の域に押しやられてしまった。

確かに川上が引く資料には我田引水があり、伝承を多用するなど史学方法論上の瑕疵が見られる。けれども、それは郷土史家特有の郷土愛による情熱が成せる業である。川上は、集中に詠じられた「立山」を毛勝山に比定している。そして、「そがひに見ゆる」を毛勝山の東斜面が朝日に輝くことから読み解こうとした。かかる「そがひ」の「解釈論」には同意できないものの、東斜面の輝きに着目した視点は卓見であったと思われる。

(2) 私考による「立山」の毛勝山説

筆者も立山の毛勝山説にたつ1人である。次にその論旨を述べておきたい。

家持と池主による一連の歌群では、立山と片貝川とがセットで詠まれている（巻17・4000、4002、4003、4005）。片貝川の上流には毛勝山（標高2,414m）がそびえ立っている。頂きは、主峰と南峰との二峰から成る（写真8）。とりわけ頂部の姿相は奈良時代の人々が神奈備と領いて来た奈良の二上山（写真9）や茨城の筑波山と似ている。

家持は、越中（富山県高岡市）の二上山に「皇神」を重ね仰いでいる（巻17・3985）。「皇神」は「立山賦」（巻17・4000）の中核に置かれている。「皇神」は、山上憶良が「大和の国は 皇神の 厳しき国」（巻5・894）と詠じたことに象徴されるように大和の神を原点に置く思想である。家持は、奈良時代を代表する高級官人である。彼が、「皇神」を山容に重ねて詠じる時、そこには奈良時代の大和人による神奈備思想が投影されていると推測されるのである。

重要なのは、現代の私たちが感動を覚える山容に「皇神」が宿ると勝手に思い込むのではなく、奈良時代人である家持がどのような山容に皇神が領いていると思ったかである。奈良時代には各地に「神体山」が認められている。当時の神体山で“連峰”全体が比された例は一つもない。三輪山、二上山、日光男体山、筑波山、伊吹山など奈良時代の祭祀の対象となった山はいずれも単体の神奈備として遥拝されている。「立山」もかかる神体山思想において理解されなくてはならない。このようなことから、筆者は集中の立山（多知夜麻）は、毛勝山がふさわしいと考えている⁽²⁵⁾。

(3) 「朝日さし そがひに見ゆる」の景

以下、万葉集の「立山」を毛勝山に同定して記述を進める。この場合、歌作者の立ち位置を片貝川の下流左岸に位置する魚津市仏田遺跡（奈良・平安時代の官衙的性格を有する遺跡であるが家持時代よりは幾分新しい時期に属する）の辺りに仮定しておきたい⁽²⁶⁾。

予備調査として2011年4月13日に仏田遺跡に立って日の出の観測を行った。朝5時51分に東北東に位置する負釣山の南麓辺りから太陽が昇った（写真10）。この時期の立山連峰の峰々にはまだ冠雪がある。大小の稜線の巖が荒々しく山肌を刻んでいる。僧ヶ岳～毛勝山の山肌が薄明りを増した。この時、毛勝山の北東斜面に残る雪肌が照り輝いた。川上正二が感動した景である。雪稜線はM状をなし、斜位方向に双峰が現れた。

毛勝山の正面観は双峰を示す（第3図 一A面）。大伴家持や池主はこの景に「神体山」を見、二峰が並び立つ山といったことから「立山」（多知夜麻）と称したのであろうと思われる。「朝日さし」の瞬間に斜め後方にもう一つの“立山”が浮かび上がった（第3図 一B面・写真11）。筆者は「そがひ」の語句は、ある種の相似形が、「斜めに向かい合う」や

「斜め後ろ」の関係にある場合に用いられているとみている。これまで日中、毛勝山を眺めている時には気づかなかったが、朝日のライトが当てられてみると、それが見えてきた。コロンブスの卵である。



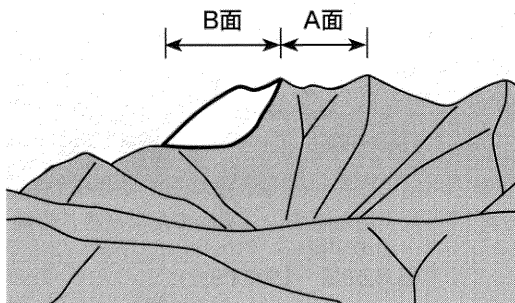
写真8 片貝川中流から見た毛勝山（近景）



写真9 奈良・二上山（桜井市から）



写真10 仏田遺跡の日の出の景（4月13日・5時51分）



第3図 毛勝山の正面（A面）と北東斜面（B面）の模式図

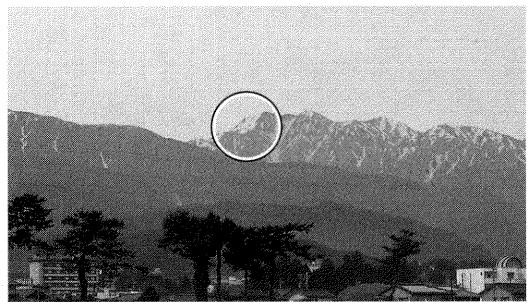


写真11 毛勝山・第3図B面の景（○印）



写真12 片貝川左岸の日の出の景（6月8日・5時03分）



写真13 片貝川左岸の日の出の景 (6月16日・5時03分)



写真14 毛勝山の日の出の景
(6月8日・5時04分)



写真15 毛勝山の日の出の景
(6月16日・4時49分)



写真16 早朝の片貝川における川霧の景
—林の上方など—
(6月15日・6時38分) B面が光っている



写真17 片貝川と毛勝山「雲居のたなびき」の景
—山の中腹—
(6月29日・19時19分)

ただ、仏田遺跡からの眺望は周囲に住宅地や建築物があつて6月頃の日の出の観測環境としては充分でない。そこで北東約800mの持光寺地内の片貝川左岸堤防を定点観測地とした。ここでの夏至の太陽は真東から約33度北寄りの烏帽子山(483m) 辺りから昇る(第2図)。冬至には真東から約33度南寄りの烏帽子山(1,274m) 辺りから昇る。この地点での早朝観測は5月19日から7月6日の間に計10回に及んだ。家持が「立山賦」を詠んだ(陽暦)6月13日と池主が「敬和立山賦」を詠んだ6月14日の早朝はあいにく雲空(ただし日中は晴天)で、日の出が見られず観測を断念した。

ここでは、直前の6月8日の観測を紹介しておきたい。毛勝山にはまだ残雪が見られる。朝5時03分日の出の兆しが見えると山肌は一気に薄暗くなった。そのような中であって北東斜面頂部（B面）だけが、白く照り輝いていた（写真12・14）。それは4月13日の観測時より太陽光線が強い分だけ強烈な印象を与えた。5時06分には、太陽が完全に昇った。この時も毛勝山の北東頂部は光っていた。ところが直後の5時10分には山岳全域にモヤがかかって勇姿は見えなくなってしまった。この日、再び毛勝山が姿を現したのは6時30分頃であった。

6月16日は5時03分に日の出があったが、毛勝山はそれ以前から全体が明るく照らされていた。北東部は一面の白色の輝きを放って鮮明であった（写真13・15）。

それは「朝日さし そがひに見ゆる」景、そのものであった。ここにおいて「立山」への「朝日さし」によって引き起こされる「そがひに見ゆる」は、実地にそれを見たものでないと理解できない現象であるとの感を強くした。つまり本歌は、“囑目の描写”であると確信した。

早朝での、かかる囑目について家持や池主にとって何ら障害はなかったであろう。舒明天皇8年（626）7月に出された法令では、「卯の時の初め（午前5時頃）に出勤して、巳の時が終わったあと（午前11時過ぎ）に退出するようにとされている」、「位をもっている者は、遅くとも午前5時には朝廷の入り口の南門前に並んで、日の出を待っていなければならぬ」とされている。律令制にあってもほぼ同じ出勤形態がとられていたとされている⁽²⁷⁾。

家持や池主は、奈良時代の高級官人である。すなわち、彼らが早朝の「朝日さし そがひに見ゆる」景を見るのは、日常の生活の一部であったとできよう。

前述のように奥村和美は「立山賦」が「帯ばせる 片貝川の 清き瀬に 朝夕ごとに たつ霧の」と詠むのは、囑目の景の描写であるとしている。片貝川とその上流には実際のところ“朝夕ごとに”川霧のたつ風景がある（写真16）。片貝川とは下流域で合流して河口を一にする布施川がある。両河川はそれぞれ深い谷から一気に平野へと流れでている。

それは霧の発生しやすい地形を成している。6月の観測では、いつも谷あいには霧やガスがかかっていた。暖かい空気と冷たい空気が混ざり合って発生する「混合霧」や、山の斜面に沿って湿った空気が上昇し気温を下げることで発生する「滑昇霧」のいずれかを見ることができた。また、この時期の毛勝山とその周辺には、よく雲がかかる。晴天の夕方に、それは顕著である。「夕されば 雲居たなびき 雲居なす」（巻17・4003）の景が日常的に現れる（写真17）。これらのことも、「立山賦」や「敬和立山賦」の歌群の景が、毛勝山と片貝川の地を舞台としていることを支持するであろう。この地では歌群の「立山」の景のすべてが合理的に説明できる。

(4) 囑目の景の描写

ここで現地での実作論争に触れておきたい。家持の「立山賦」は天平19年4月27日（陽暦6月13日）である。池主の「敬和立山賦」はその翌日に詠まれている。かかる「立山賦」の前日4月26日には、題詞に「守大伴宿禰家持が館に飲宴する歌一首」（巻17・3999）とあるように、家持の館で酒宴が催されている。その翌日早朝に、家持と池主が新川郡の片貝川の岸辺に立てるかどうかについて論争がある。

和田徳一は「国府のあった伏木から片貝川の辺りまでの距離は僅か十一、二里しかなく、（…中略…）乗馬で出向く行程としては、一日とはかゝらぬ楽な行程であって、前日宴会があったからと言っても、決して無理だとは思われないのである」と現地実作説を説いている⁽²⁸⁾。和田説は、その後、魚津市在住の郷土史家たちによって熱烈に支持されているところである⁽²⁹⁾。

実は、現地実作説は今日の万葉研究では少数派に属する。話題にすら上らないのが現状である。研究の主流は越中国府からの立山遠望説にある。その「立山」とは、狭義の立山（雄山・大汝山・富士ノ折立＝立山三山）や広義の立山連峰（劔岳・立山三山・大日岳など）を指している。川上正二説について中村宗彦は次のように評している。「川上による）池主が片貝川付近で、その眼前に聳える毛勝山を詠じたものとされる見解であるが、家持や池主が短期日の間に国府から現地へ往還したとする論は説得性に欠ける。やはり国府から立山連峰を望んだ詠とすべく、問題はこの片貝川が詠まれた理由の方に展開されるべきであろう」としている⁽³⁰⁾。かかる見解は穏当であり、多くの万葉学者が説いているところである。

一方、万葉学者の奥村和美は“囑目の景の描写”であるとする。筆者にはかかる奥村説は魅力的である。それを援用すれば家持と池主は、いつかの時点で片貝川の辺に立っていたということになる。

これまでの論争は歌作日に現地を訪れていたことを暗黙の前提としている。そうであるならば中村宗彦が言うように、宴会の翌朝に片貝川の岸に立つのは状況的に無理がある。和田徳一は馬を駆ければ可能とする。さらに加えれば海路だともっと早い。けれども、可能であれば良いといったものでもない。そもそも歌を詠むために国守家持と掾池主とが早駆けするというのは高級官吏の姿として想像できない。国守や掾は国庁の最上級官としての威厳をもって国政にあたっている。やはり、これらの歌群は4月27日と28日に国府で作られたとするのが穏当であろう。とはいっても筆者は「伏木国府からの遠望説」に賛同しているわけではない。

歌群の“囑目”と“歌作”の日が一致しているといった前提を外して考えてみたい。『万葉集』の家持歌群には歌作日が記されている。それによれば3月30日に“二上山の賦を興

によって（巻17・3985～3987）”詠んだ以降、歌作が成されない日が続く。次は4月16日“夜遥かにほととぎすの声を聞いた感慨（巻17・3988）”を詠んでいる。この間4月1日～15日まで、ちょうど半月間の空白期間がある。続いて4月16日～4月30日の半月で宴会や歌作を行っている。家持は5月初旬には税帳使として上京している。この、月の前半と月の後半といった計画性を思わせる暦の背景に何かがある。憶測をまじえるが4月1日から15日までの半月間、家持と池主は越中国正税帳を整えるための国内視察を行っていた可能性があるとしたい。この頃は天気も安定しており国内巡視をするには良い時期である（第1図）。

この時、家持と池主は新川郡に赴き、片貝川とタチヤマ（毛勝山）の景を“囑目”したと考えたい。それが認められるとすれば、家持は囑目の感興をとりわけ大切にしたと思われる。毛勝山は双峰を有する。家持が「立山賦」で「皇神の 領きいます」と詠むとき、そこには奈良の二上山をモデルとした「神体山」を重ねている⁽³¹⁾。家持の「立山賦」や池主の「敬和立山賦」は、人麻呂吉野讃歌（巻1・36～39）を先蹤とする吉野讃歌の伝統を意識している⁽³²⁾。家持の吉野への想いには強いものがある。陸奥国出金の報を契機として、吉野離宮行幸時のための歌を予作している（巻18・4098～4100）。天平20年春巡行で能登半島の鳳至郡において「饒石川」（巻17・4028）の景に触れた時、そこに吉野川を投影していたことも分かってきた⁽³³⁾。

家持にとって“吉野”は皇室と関わる特別な地であった。「立山賦」と「敬和立山賦」は、かかる吉野を意識しての特別なものであったに違いない。だからこそ家持と池主は“囑目”をあたため、山部赤人の表現を踏襲することを共通認識とし、国府の地において「賦」形式で歌作を成したと推測するのである。

V. おわりに

筆者は、「立山賦」や「敬和立山賦」の歌詞舞台を、一般に説かれている立山や立山連峰ではなく、魚津市域を流れる片貝川とその上流にそびえる毛勝山が相応しいと考えている。「立山」を毛勝山に比定することで歌詞の理解が自然なものとなる。これまでの万葉学は、この比定を排除してきたが故に歌詞内容と実際の「立山」の景とのギャップを生じるところとなった。このためであろうか。立山連峰の劔岳の麓で長じた筆者には、見事に「立山」を讃えた妙訳に接したとしても心に響くものがなかった。どこかに現実の景との距離感があった。それでも「妙訳」に立山の感動を覚えるという人がいるとすれば文学的感性の鋭い方か、地理感に疎い方か、万葉好きの旅人かのいずれかであろうとさえ思えてくる。

もっとも万葉歌は、文学世界のことであるので変幻自在に解釈される性質を有してい

る。仮に、「伝聞・イメージ説」が成立するようであれば、ここで述べてきた拙論はすべて水泡に帰する。しかしながら毛勝山における「朝日さし そがひに見ゆる」の景は、歌詞内容にふさわしい現象を示した。歌群の実景確認作業は、むしろ“囑目の景による描写”を証するものとなった。それは奥村和美が説いた万葉学からの視角とも整合する。

本稿で述べたように、「朝日さし そがひに見ゆる」の景は、通説による「伏木国府からの遠望説」の“立ち位置”では出現しない。一方、毛勝山には夏でも万年雪があり⁽³⁴⁾、頂には常に雲居がたなびいている。片貝川には朝夕に川霧がわき立っている。「そがひに見ゆる」の景も、筆者が本年報の前号で示した在り方と矛盾しない。かかる拙論が、従前来の「立山賦」や「敬和立山賦」の山岳比定や舞台について再考をうながし、より深い検討が成される契機となれば望外の喜びである。

なお、筆者は考古学を専攻する者であり万葉学については門外漢である。そのため先行研究への誤解や基本文献の遺漏など多くの不備があるものと思われる。それらについて識者のご教示やご批判を頂ければ幸いである。また、図版などの作成にあたって畏友・中村年昭氏のご協力を頂いた。ここに御礼申しあげたい。

註

- (1) 藤田富士夫「万葉集の「そがひ」に関する若干の考察」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』No.9 敬和学園大学 2011年, 117~133頁
- (2) 『万葉集』の引用は次の図書に依った。小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集7 万葉集②』小学館 2006年, 205~208頁
- (3) 山田孝雄『美夫君志會選書第一篇 萬葉五賦』一正堂書店 1950年, 115頁
- (4) 武田祐吉『増訂萬葉集全註釋十一』角川書店 1957年, 481頁
- (5) 澤瀉久孝『萬葉集注釋』巻第17 中央公論社 1967年, 186頁
- (6) 武智正人「そがひ考存疑」『愛媛国文と教育』第13号 愛媛大学教育学部国語国文学会 1975年, 2頁
- (7) 青木生子、井手至、伊藤博、清水克彦、橋本四郎校注『新潮日本古典集成 萬葉集 五』新潮社 1984年, 99頁
- (8) 広瀬誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』桂書房 1992年, 481頁
- (9) 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『新編日本古典文学全集⑨ 萬葉集④』小学館 2006年, 207頁
- (10) 藤田富士夫「越中時代の相伴家持の歌とその環境」『第18回春日井シンポジウム 2010年「万葉集」に歴史を読む』春日井市・春日井市教育委員会・春日井シンポジウム実行委員会 2010年, 2~4・14頁

- (11) 写真を趣味とする関口衛氏は、この辺りの事情を「伏木に居て立山連峰を遠望した時には、殆んどはボヤーとしか見えない」、「立山連峰が綺麗に見える日は年間を通して何日もない」と述べている（関口衛『家持が立山の賦に込めたもの』自家版 2011年、30・38頁）。ただ関口氏や筆者は、たまたま訪れた時の印象によって評している。この点について国府域“立ち位置”論からのご教示を頂きたいと思っている。なお、観光写真でよく見かける立山連峰の雄大な冠雪光景は秋から春先の空気が澄んだ時期に撮られたものである。それは国府域の北西約3kmに位置するピュースポット「雨晴海岸」から超望遠や超広角レンズを用いてのものであって、家持や池主が肉眼で見た立山連峰の姿形とはかけ離れたものである。
- (12) 仮に、可能性があるとすれば、南東に位置する鷲岳（2,617m）や真東に位置する烏帽子山（1,274m）辺りから日の出を見る秋分～冬至～春分の頃とできようが歌作時期からみて成立の余地がない。
- (13) 小野寛「「そがひに」考」『論集上代文学』第9冊 笠間書院1979年、116～117頁
- (14) 古館綾子『大伴家持自然詠の生成』笠間書院2007年、59頁
- (15) 藤田富士夫『縄文再発見』大巧社 1998年、12～15頁
- (16) 註1に同じ。
- (17) 鴻巣盛廣『北陸萬葉集古蹟研究』宇都宮書店 1934年、70頁
- (18) 広瀬誠「第六章 萬葉集と越中 第四節 越中萬葉の舞台」『富山県史 通史編1 原始・古代』富山県 1976年、887頁
- (19) 広瀬誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』桂書房 1992年、477頁
- (20) 梶川信行「古代王権の世界認識と越中・立山 ～『万葉集』の立山の賦をめぐって～」『研究紀要 黒部川扇状地』No.36 黒部川扇状地研究所 2011年、53頁
- (21) 奥村和美「家持の『立山賦』と池主の『敬和』について」『萬葉集研究』第32集 塙書房 2011年、163～197頁
- (22) 上野誠『万葉挽歌のこころ 夢と死の古代学』角川選書 2012年、116～122頁
- (23) 川上正二『家持の立山の賦 北陸の古代を探る』富山出版社 1982年、46～47頁
- (24) 註19、481頁
- (25) 註10に同じ。藤田富士夫「大伴家持の春巡行と立山の景」『万葉古代学研究所年報』第9号 万葉古代学研究所 2011年
- (26) 青山祐子「4 入善黒部バイパス関連遺跡発掘調査」『平成20年度埋蔵文化財年報』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2009年、41～45頁
- (27) 鐘江宏之『全集 日本の歴史第3巻 律令国家と万葉びと』小学館 2008年、168～169頁
- (28) 和田徳一『魚津市と萬葉集』魚津市文化財保存会 1954年、64頁
- (29) 註23、79～80頁。関口衛『家持が立山の賦に込めたもの』私家版 2011年、36～37頁
- (30) 中村宗彦「「越中立山縁起」・「そがひに見ゆる」考」『天理大学学報』160 天理大学学術研究会 1989年、19頁
- (31) 註25に同じ。
- (32) 註21、190頁
- (33) 藤田富士夫「大伴家持が見た饒石川の景」『敬和学園大学研究紀要』第21号 敬和学園大学人文学部 2012年、65～84頁
- (34) 佐伯邦夫『富山湾岸からの北アルプス』ナカニシヤ出版 2006年、48頁